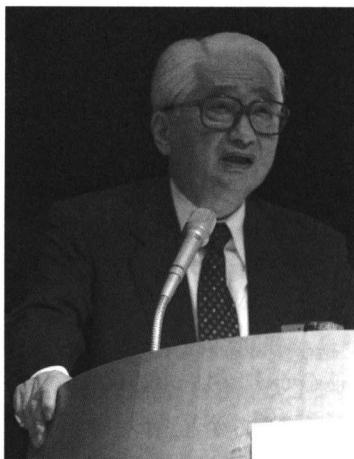


「子ども学とは何か—育つ育てる」

日本子ども学会代表・東京大学名誉教授
小林 登氏



PROFILE

小林登（こばやし・のぼる）

1927年東京生まれ。日本子ども学会代表。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。CRN所長。1954年東京大学医学部卒業。医学博士。著書には小児科学の専門書のほかに、『ヒューマン・サイエンス』（中山書店）、『子どもは未来である』（メディサイエンス社）、『育つ育てるふれあいの子育て』（風濤社）、『風韻怎思（ふういんしんし）』（小学館）など多数。

「育つ」「育てる」という2つのキーワード

私は、子どもについて説明する時に、いつも「育つ」「育てる」という表現を使います。これは子どもが生物学的存在として生まれ、そして育ち、社会的存在として育てられるということを意味いたします。子どもは育つ力をもって生まれてきて、親そして世話を大人は、その力を働かせるように育てるわけであります。もちろん「育つ」と「育てる」はインタラクティブなもので、明確に分けられるものではありません。本来、両者が相まって作用するので、私はいつも「育つ」「育てる」という言葉を使うわけです。

私たち小児科の医者は、育つという場合に、体が育つことを「成長 Growth」、心が育つことを「発達 Development」と言います。外国語の小児科の本では、広い意味で「育つ」というときには Growth and Development という言葉を必ず使います。少し専門的になりますが「成熟する maturation」という言葉を使うこともあります。

育てる方は、小児科医は育児、保育を中心に考えますが、もちろん教育も「育てる」という大人の営みの一つであります。

この二つが大切であるということがわかっていますが、私たち大人は得てして子どもをどう育てようかという、「育てる」ことのみに关心を向けがちです。子どもはこうあるべきだという、大人の望む形で「育てる」視点からものを見ていることがしばしばです。親もそうですし、ある意味では学校の先生たちもそうだと思います。しかし、子

どもは子ども自身の育つ力をもっているわけです。しかも、それは子ども一人ひとりで違っているわけです。違っているからこそ社会というものがエネルギーをもって発展していくのだと、私は思います。

私たち大人は、子どもの育つ力を語るための言葉はあまりもっておりません。というのは、実は子どもの成長・発達の仕組みを考えるには、まだまだブラックボックスが過ぎるという事情も関係しているのではないかでしょうか。

子どもは小さな大人でなく、独自の成長・発達の仕組みをもっています。しかし、それはまだまだ十分に解明されていません。そのために、子どもは白紙で生まれてくると考えがちで、私たちは子どもをどう育てるかに关心が向きやすいのだと思います。しかし、胎児、新生児の行動研究が大きな力になり、徐々に子どもがどう育つかという仕組みについても、解明の糸口が生まれてきたと思います。

最近は、超音波で撮った胎児の画像を三次元に表現する機械が開発されて、胎児をリアルな格好で見ることができます。母親のお腹の中で動くところや口を動かすところもちゃんと見えるわけです。

そういう映像をご覧いただくとおわかりになるように、子どもは胎児の時から、ある意味で完成されています。生まれてからやることは、胎児の時代に全部やっているといっても過言ではありません。私たちは新生児を見て、なんと未完成な存在だと思いますが、実はそれは子宮という環境から外に出て、新たに適応しなければならない過程での未熟さであって、本来かなりの育つ力をもっているということがわかってきてています。もちろん心臓も拍動させ、おしきもし、手足を動かし、指を吸いますし、ほほ笑むという人間的なこともできるわけあります。最近は、三次元画像によって、胎児は微笑むだけではなく、もっと複雑な表情を示すこともわかっています。

心と体のプログラムという考え方

私が子どもの育つ力を理解するために基本に置いたのはプログラムという考え方です。それは、イギリスのJ. Z. ヤングという学者が1978年に出版した『Programs of the Brain』という本から学びました。ヤングは神経生物学者で、ナポリの海洋研究所で行ったイカやタコの行動の研究により、生物の神経システムの解明に業績を上げ、ノーベル賞候補にもあがった人であり、日本にも日本医師会の招きで一度来日されています。

胎児や新生児は何ら教育を受けていませんので、遺伝子によって、言うなれば自己組織化されたものと理解されます。したがって、子どもは生まれながらにして心と体のプ

ログラムをもっていると考えられます。

たとえば、成長ホルモンのように直接発育に関係あるプログラムがあります。成長ホルモンの分泌というのは、育つための一番基本的なホルモンの分泌機構であり、それは子どもの全身の状態によって影響を受けながら、子どもの成長を促すように働きます。このような心と体のプログラムが働くことによって子どもは「育つ」と考えられます。そして、このプログラムをうまく働かせ、機能させることが「育てる」ということになります。

私は「育つ」「育てる」という言葉を揃えて使いますが、その二つは切り離せません。子どもの体の成長と心の発達というのは、この両方によって支えられているからであります。私の興味がハードの小児科からソフトの小児科学へ広がっていった理由もそこにあります。本来切り離せないはずのものが別々の分野になっているのでは、真の子どもの理解には至らないと考えたからです。

私は、この思いを研究に結びつけるために、テーマとして「愛」というものを考えました。もっと詳しく言えば、「優しい心」「温かい心」とも言えるかと思います。「愛」は子どもの心を読み取る力を高め、触れ合いを豊かにいたします。子どもの発育にとって親の愛情が欠かせないのは、誰でも知っている当たり前のことですが、私は科学としてそれを研究したいと思いました。

動物が研究対象の時には、私たちはそのようには考えません。ほとんどの場合、食物と生態環境だけを問題にいたします。しかし、人間の場合は、「この子どもはちゃんと愛されたからこんなに立派に成長した」「優しい心や温かい心が子どもの心を育てる」などと言います。その愛の意味を生物学的に解き明かしたかったわけです。

たとえば、親に語りかけられなかった赤ちゃん、抱きしめてもらえなかった赤ちゃんには、心身の健康面で問題が起こることが多いことは、昔から知られております。愛されないために身長が伸びず、体重も増加せず、知能も低下し、人格形成も阻害される事例を、診療の場ではしばしば見ます。これは成長ホルモンの分泌が落ちるわけですが、私たちは母性剥奪症候群 maternal deprivation syndrome、あるいは母親だけの問題でなくして、むしろ本質はエモーションにあるというので、情緒剥奪症候群 emotional deprivation syndromeと呼びます。

一体どうしてそんなことが起こるのでしょうか。もちろん小児科医や子どもの養育に関する人にしてみれば、あまりにも当たり前のことであり、そのことを指摘する人はたくさんおります。しかし、その問題を真正面から科学的に取り上げる学問は見当たりませんでした。もちろん体の

成長については、すでに小児科医の研究によって、成長ホルモンの分泌不全が示されておりますが、不明な点が多く、さらに心の発達となると完全には説明できておりません。

生物学的に考える愛の問題

私は、「子ども学」という学問を構想した時に、その中心となる大きな課題は、当初からこの愛の問題だと思っていました。もちろん人文系の学問の中には、人間関係や人間心理をテーマとする分野があります。しかし、それらはいずれも精神活動を扱うものであり、子どもの生物的な成長、発達との関係を追求する学問ではありませんでした。また、愛着の研究というのもありますが、それは「育つ」「育てる」という相互の仕組みを明らかにするには十分ではないと考えました。

「子ども学」は独自にそういった課題を研究し、科学的な学問に基づき、明らかにする必要があると思っていました。「愛」は普通心の問題と考えられます。しかし、男女の性愛を考えてみればわかる通り、「愛」も生物学的な基盤をもっていますし、その発現としての行動も多様なわけです。

人間の子どもは未熟な存在として生まれてきます。世話をしなければ、たちまち死んでしまいます。哺乳動物ですから、乳をあげなければ成長できないこと、体が大きくなれないことはもちろんです。あらゆる点で大人たちが世話をすることをあらかじめ想定しているとしか思えないほど、無防備な状態で生まれてきます。私たち大人が子どもをいとおしいと思うのは、生物学的なシステムがその根底にあると十分考えられるのではないかでしょうか。

私の研究成果として具体的に一つあげられるものは、母子相互作用の研究であります。1970年代の終わりから80年代初めにかけまして、12年間にわたり厚生省母子相互作用研究班の責任者として、小児科医ばかりでなく、産科医、看護師、助産師、そして心理、教育の専門家とともにこの研究をいたしました。その成果はいろいろな意味で社会の子育てのあり方に役立っていると思います。

母子相互作用はもちろん母と子の関係であり、当然のことながら父子相互作用という父と子の関係のこともあります。考えてみれば、親子以外の友人関係、師弟関係、職場での人間関係も、すべて相互作用なしには信頼関係を構築できないわけで、相互作用は人間関係の基本だと思います。

母子相互作用の研究は、母親がどのように働きかけ、それに子どもがどう反応するかを研究するだけではありません。子どもからの働きかけで、母親自身がどのように変化していくのかにも高い関心をもっています。だからこそ相

互作用と呼ぶわけです。

母親が子どもに働きかけるのは当たり前ですが、実は子どもも母親に働きかけているのです。赤ちゃんは泣き顔やまなざしで母親に行動を促します。お互いに自立した生命が影響を及ぼし合うわけで、機械と人間の間では決して起こらない状態だと思います。相互作用というのは、お互いに影響し合い、シンクロし合うことで生まれてくる一つの生命現象であり、愛する心をもつことと、相互の働きかけで愛情をはぐくむことは、生物学的に微妙に異なっているのではないかと思います。

子どもは、生まれながらにして発育していくための心と体のプログラムをもっています。母親も母乳を分泌するというような心と体のプログラムがあります。ある意味では、妊娠、分娩という営みも一つの子育てのプログラムだと思います。この子どもと母親の相互作用によって、お互いのプログラムがうまく動き、子どもの心と体のプログラムもフル回転するし、母親の心と体のプログラムもフル回転するようになれば、理想的な子育てができると思います。

また、母親だけではなく、父親も、やはりある意味でいうと心と体のプログラムをもち、子育てのプログラムをもっていると思います。現存する哺乳動物の中で、48種類ぐらいは父親が子育てをするそうですから、人間も明らかにそういう力をもっていると考えられます。しかし、それぞれの動物が子孫を残し、生きていくためのセッティングの中で、子育てのあり方は変わっております。我々人間が女性に子育てを預けたというのも、社会文化の影響が強く関係していると思います。

隣人のエモーショナル・サポート

ドゥーラという考え方があります。これはマーガレット・ミードの弟子であるゲーナ・ラファエルというアメリカの文化人類学者が、どんな社会でも必ず、女性が生命のバトンタッチをする時には助ける人がいるとして、それをドゥーラと呼んでいます。日本でいうと昔のお産婆さんがそうかもしれません、そういう人のエモーショナル・サポートによって、母親の子育ての心のプログラムがうまく働いて、子育てがうまくいくのだと彼女は報告しています。

ラファエルは、イルカは雌イルカが分娩を始めると、周囲に集まってきて生まれた子どもを海の上に突き上げて息を吸わせるような行動をとるというような象徴的な例を上げ、実際にフィリピンの山の中、アフリカの山の原住民たちの子育てのあり方を研究して、ドゥーラという考え方を提倡しています。

最近、虐待問題が非常に深刻になっていまして、私も厚

生労働省がつくった虐待に関する研修センターの非常勤所長を務めておりますが、現在虐待が増えているのは、子育てをサポートするドゥーラ役が地域社会になくなってしまったということも原因の一つではないかと考えています。

我々は霊長類の一種として、群れをして生活しております。一人でぽつんと単独で生きているサルがないのと同じで、私たち人間も単独で生きることはしません。生物学的には群れ、社会学的には社会共同体を形成して私たちは生きているわけです。人間関係を形成するインタラクションを考えれば、家族愛や隣人愛も、群れをつくるための生物学的な仕組みと考えることができます。

また、人は魚類や鳥類と違って、群れをつくるだけではなく、相互間で言語や身体的なやりとりを通じて、コミュニケーションを頻繁に取り続けております。コミュニケーションこそ人間のインタラクションにとって必須のものであることは、どなたも理解できると思います。人という霊長類が群れを維持していくためのプログラム、そんな考え方もできるのではないかと思っています。

私は、愛を、あるいは心を、生物学的なプログラムとして解き明かし、社会的意義を考えることは可能に思えてきました。

要素還元論の先にあるもの

私たちが従来、愛の現象を科学的な対象としてこななかったことには、私は理由があると思います。

デカルト以来の近代科学が対象としてきたのは物質であり、後にはエネルギーが、戦後になると情報も大きなテーマになりました。そしてあらゆる自然現象を要素還元し、部品のように分解し、改めてそれを組み立てて総合化し、物事を説明しようとしてきました。

もちろん私たちの周囲にあるいろいろな現象は、それで説明することができます。しかし、このやり方では、私たちが今考へている愛の問題は説明がつきません。機械の部品のように人を組み合わせてみても愛は生じませんし、共同体もできません。人間関係をなくして人をばらばらにしたのでは、愛の問題を考えることはできないと思います。

私たちは、子どもを研究する場合には、いつも必ず親の協力を求めます。子どもを単独に取り出して研究はできません。そんなことをすれば、子どもはまともに発育できなくなります。家族の中で愛される人に囲まれて、関係とインタラクションの中で、初めて子どもは子どもとして生きていけるわけです。

ですから、私たちが愛について研究するためには、カルテシアンの流れの中にある要素還元論的な方法だけではな

く、全く新しい方法を見つけ出さなければなりません。要素を研究するのではなく、要素間の構造を探る方法です。それも建造物のように静的、スタティックな構造ではなく、生き物として動的な、ダイナミックな構造を説明できる方法を探さなければなりません。

そこで先ほどご紹介したヤングのシステム情報論の考え方方は、非常に重要な力になると思います。脳にある心と体のプログラムが情報によって作動し、生理的な力を發揮し、子どもは生きる力、育つ力をつくり出し、母親を含めて親は、親の子育ての力、そして生きる力をつくり上げができるわけです。

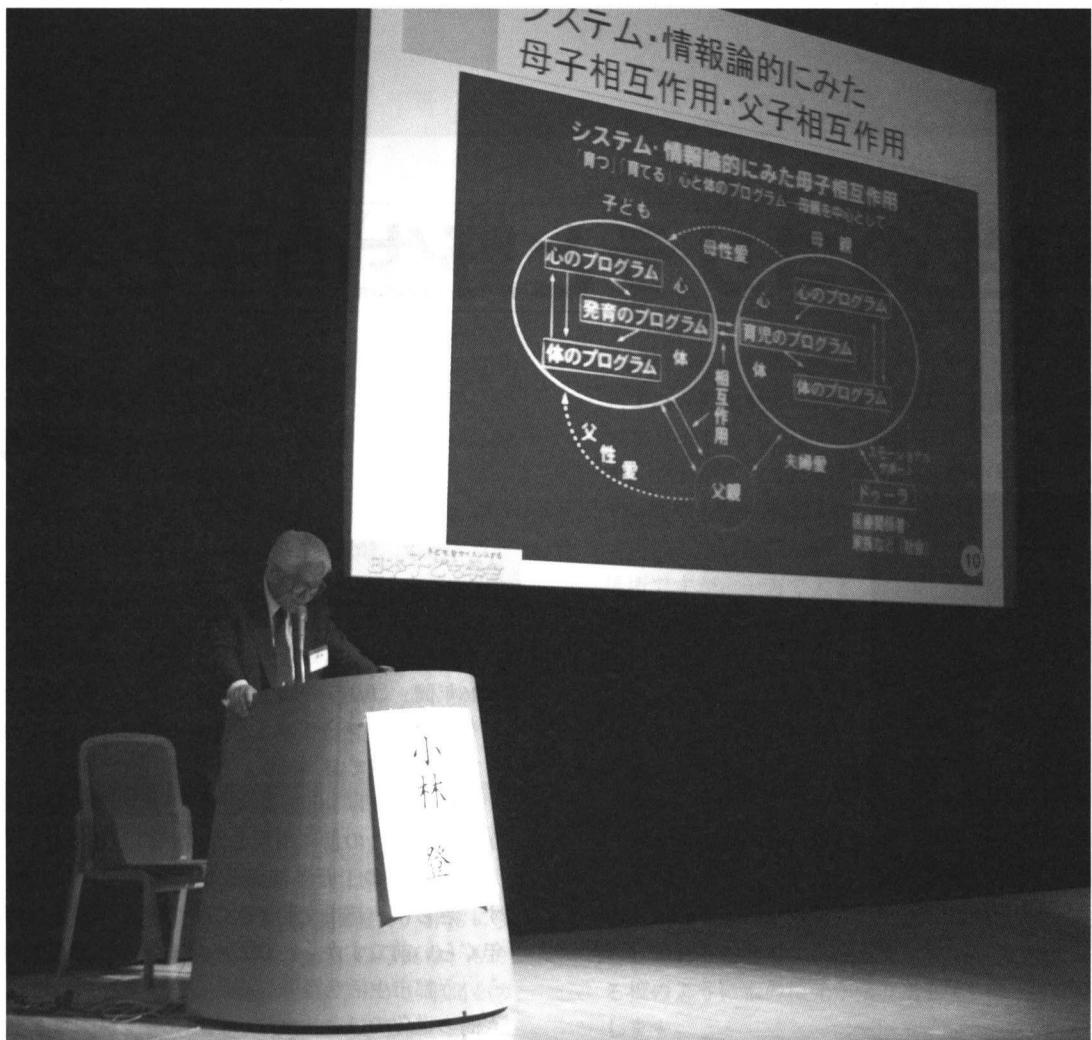
さらに、この情報は理性の情報と感性の情報に分けることができると思います。心の問題や愛の問題を考える時には、当然のことながら感性の情報が大きな問題になります。母親が我が子に「いい子ね」と語りかける時には、必ず独特のリズムとピッチで語ります。この「いい子」という言葉の意味は理性の情報であり、リズム、ピッチ、抑揚は感性の情報です。この感性の情報と理性の情報がインタラクションして、人間は豊かなコミュニケーションをしていると考えることができます。

構造物のようなスタティックな構造から動的な構造の解明ということになるわけで、要素間の現象を解明する新しい考え方、システム、カオス、揺らぎ、複雑系、自己組織化、共創、創発というような考え方も、これから「子ども学」を考えていく上で重要になると思います。人の有機的な構造を探る学問の領域も非常に進歩してきて、遺伝学、免疫学、脳科学、進化生物学というような学問も、子ども学の理念形成には非常に有効な考え方になると思います。

脳の三層構造から考える

時実先生やマクリーンの考へた脳進化に基づく脳の三位一体説も、非常に重要だと思います。我々の脳は生命を維持する脳、つまり循環・呼吸・運動などを司る生命脳が脳の中心にあります。それをカバーするように、生存を確かなものにするための本能や情動のプログラムをもつ辺縁脳があります。そして、その一番表に新しい皮質があって、そこに知性のプログラムがあり、とくに人間を人間と特徴づけるプログラムは、前頭葉でよく発達していると考えられています。

脳の進化は、軟体動物が脊椎動物に分かれた時にできて、軟体動物の体の中に分散していたプログラムを集めて脳の中にまとめたと考えれば、説明ができます。魚類や爬虫類の脳は、主に人間の脳幹に当たるところが中心で、呼吸や



循環、消化、代謝、運動、バランスなど、そういうものに関係するプログラムを有しています。本能にあたる食欲や性欲、さらに感情、情動、攻撃などの心のプログラムをもった、たくましく生き、生存を確かに皮質が、幹脳をカバーしている辺縁脳で、これは哺乳動物の中では、カンガルーなどの原始的な哺乳動物にその特徴が顕著に現れています。

新しい哺乳動物になってきますと、知性などの高度の精神機能のプログラムをもった新しい脳がこの辺縁脳をカバーします。人間の場合は、前頭葉の皮質が高度に発達して文化文明をつくり上げるという構造になっていると考えられます。「愛」はこの中央にある辺縁脳を活性化するし、脳幹の生命に直接関係するプログラムと大脳皮質の知性のプログラムを同時に活性化すると考えれば、子どもにとっては非常に重要なことがわかると思います。もちろんこの三層構造はこんなに単純なものではなく、大変複雑です。それを明らかにするのは、これからの大脳科学の大きな役割ではないかと思います。

私が生物学的に子どもを解明したいと申しますと、心をテーマとする学問を追求されてきた方々から、機械論的に子どもを解析するのだろうと警戒されます。しかし、生物

を扱う学問は本来機械的であってはならないわけで、要素還元論ではない方法が求められます。幸いなことに現代科学の世界では、システムやカオスのような新しい考え方が始まっています。要素間の研究、さらに要素間の相互作用によって生まれる創発現象の研究なども進んでいます。こういったキーワードを見ますと、科学の世界も要素還元主義を取り込み、乗り越える道を見つけ出したという感じがいたします。

私が長年研究してきました愛の問題、心の問題につきましても、十分に答えてくれる学問領域が登場してきたと思っておりますが、もちろん「子ども学」というのは、それだけがテーマではありません。もっと多くのテーマをはらんでいます。

しかし、いずれにしても、「育つ」「育てる」という言葉に象徴的に表れているように、子どもは自ら、育つ力と大人たちの育てる力、その相互作用のもとに発育していくのだと考えることができます。その両者の解明が「子ども学」の大きな課題であり、人文系の人たちと自然科学系の人たちが一緒になって、分離融合科学的な発想でそのテーマを追究していくほしいと考えています。